■論　文■

マルティン・ブーバー『我と汝』覚書
～臨床牧会教育（CPE）の視座から見えてくるもの

大　柴　譲　治*

「すべての真実なる生とは、まさに出会いである。」[1]

抄　録

ブーバーの『我と汝』との出会いの軌跡と、ＣＰＥスーパーヴァイザーとしてそこから学んできたことを記す。向かい合う相手との「今ここ」での一期一会の出会いをかけがえのないものとして大切に生きるために。

Keywords: < われ - なんじ >、< われ - それ >、共感的な受容と傾聴、恩寵、聖別された感情

< はじめに >

最初にパウル・ティリッヒ（1886-1965）の言葉をもって始めることにしたい。ティリッヒとマルティン・ブーバー（1878-1965）は深い親交があった[2]。彼はブーバーの死に際して追悼文（1965）に次のように記している[3]。「（私は）その存在全体が神的な現臨の経験で貫かれている一人の人を体験した」。そしてこう続ける。「彼（ブーバー）は神に憑かれていた」(p370)。神に憑かれていた！ ブーバーはまことに「神に憑かれた」、すなわち、神の現臨をその「全身全霊」をもって証しをした現代世界における希有な預言者[4]であり、知の巨人であったと言えよう。

そのような知の巨人であるマルティン・ブーバーについて論じるということは、巨大な象の一部（たとえば「尾」）に触れて全体はこうであると断定するようなものかもしれない。そのことを知りつつもあえてこの拙論においては、私の専門である牧会学と臨床牧会教育（CPE）の視座から大きな感謝とささやかなブーバー批判を試みたい。

<序章　出会いの軌跡から>

私がブーバーの名を初めて知ったのは 1975 年、大学一年の夏に、当時静岡市の安倍川上流にあった梅ヶ島ルーテルキャンプ場[5]での青年キャンプにおいてであった。17 歳のことである。京都大学出身の先輩青年キャンパー・江頭清氏が、自分

＊ Oshiba, George J.
宗教法人　日本福音ルーテル大阪教会
学校法人　ルーテル学院

の対人関係の基本にはブーバーの『我と汝』があると私に教えてくれたのである。その後で父の書斎にみすず書房版『ブーバー著作集』全10巻を見つけ、それを父から譲り受けることができた。その第一巻に収められた『我と汝』を読んではみたが、当時の私には難解すぎてまったく歯が立たなかった。結局私は50年近くもその書物と格闘し続けることになる。正直に言うと未だに理解できない部分もあるが、今年（2023年）が『我と汝』出版百年の節目でもあるので、これまでの出会いの軌跡も含めその豊かな泉から私が汲み取ってきたことをここに覚書のかたちで記しておくことにしたい[6]。

やがて私は1986年3月に日本福音ルーテル教会（JELC）において教職按手を受け、実践神学における「牧会学」(Pastoral Care/Poimenics）と「臨床牧会教育」(Clinical Pastoral Education/CPE）を専門とするようになる。その専門領域は次第に牧会カウンセリング、ターミナルケア、グリーフワーク、スピリチュアルケア等へと拡がっていった。牧師をする傍ら、非常勤ではあったが緩和ケア病棟のチャプレンとして働く機会も与えられた（東京都墨田区にある賛育会病院)。振り返って見るとそれらの背後には常にブーバーの『我と汝』の大きな影響があったように思う。

2004年夏に私は、当時奉職していた教会[7]からサバティカルをいただくことになった。インターネットを通して調べた結果、米国サンディエゴにある VITAS INNOVATIVE HOSPICE CARE で400時間に渡って CPE 訓練を受けることになった。私にとってそれは3回目の CPE であった[8]。不思議な導きによって私はそこでブーバーとゆかりの深い三人の人物と出会うことになる。その三人は皆サンディエゴ州立大学と深い関わりを持っていた。VITAS の CPE スーパーヴァイザー（以下は SV と略記）Dr. John Gillman 氏（ルター同様に氏は元カトリック神父で、元シスターと結婚して神父を辞めている)、哲学者の Dr. Maria Davenza Tillmanns 氏[9]、そして、ブーバーの高弟であった Dr. Maurice Friedman 氏（1921-2012）である。私は Friedman 氏がサンディエゴに住んでいることを知らなかった[10]。その際に氏からは、日本語に訳されたばかりの『評伝マルティン・ブーバー―狭い尾根での出会い』(上下巻、ミルトス、2000）を贈られるという栄誉を受けた[11]。

期せずしてサンディエゴでブーバーと深い関わりを持つ三人と出会うことができたのは私にとって奇跡と呼ぶべきものであった。その意味でこの拙論は、それらの出会いに対する一つの私からの感謝の応答でもある。まことにブーバーの言うように「すべての真実なる生とは、まさに出会いである」と言わなければならない。

＜第１章　「回心」(コペルニクス的転換）～「モノローグ的生」から「ダイアローグ的生」への突破＞

若い頃のブーバーは「忘我（エクスタシー)」について熱心に研究を行っている[12]。しかし、ある出来事を契機として彼は決然としてそこから離れることになった。ブーバーはその出来事を「回心[13]」と呼んでいる。1914年7月のことである。一人の青年がブーバーのもとを訪ねてきた。ブーバーはその午前中には、彼自身が「宗教的な体験」と呼ぶある種の神秘的で陶酔的な忘我体験を経験していたようである。その日の午後、青年はブーバーのもとに何か大切な質問を携えてやって来た。いつもと同様、ブーバーはその青年に対しても丁寧かつ率直に向かい合ったが、青年がうちに抱いていた深く実存的な問いには気づかず、青年もそれを遂にブーバーに言い表すことはなかった。青年はその後、第一次大戦に従軍し早々と戦死してしまうことになる。ブーバーは自分がその青年の根源的な問いかけに気がつかず、それを受け止めることができなかったことを生涯深く悔いて嘆くことになる。それがブーバーにとって決定的な「懺悔 / 回心」の体験となり、自らが常に回帰すべき原点となったのである。彼はそれについ

て次のように語っている。「それ以来私は、例外、離脱、脱出、脱我に他ならない、あの『宗教的なもの』を見離した。或いはそれが私を見離したのである。私は、自分がそこから外へ取り出されてしまうことの決してない日常事しか所有していない。神秘はもはや開かれず、それは遠ざかってしまったか、或いはすべてがありのままに生ずるここに、住みついてしまっているからである」(『自叙伝的断片[14]』)。そのためであろう、ブーバー自身が遺言で自分が1917年以前に書いた論文で未発表のものを公にすることを禁じている。それ以降「忘我」や「陶酔」や「神秘主義」の研究をブーバーは完全に破棄することになった。そしてそれまで以上に、一期一会の「今ここ」を大切にすることに専心してゆくのである。

そのなかで彼は＜われ - なんじ＞の「出会い」や「対話」についての思索を深め、やがて1923年に『我と汝』をドイツ語で出版することになってゆく。どこまでも日常生活の中で具体的な一人ひとりを大切にしようとするブーバーの、徹底的に非陶酔的で人格応答的、現実を大切にするリアリズムの姿勢はこのような深い悔いと懺悔に由来していることを私たちは心に刻みたい。その意味でも、まことに「すべての真実なる生とは、まさに出会いである」と言わねばならない[15]。確かに私たちにおいては、人生を振り返るとき出会うことなくすれ違ってしまった出会いを思い起こして心が痛むことも少なくない。どのような出来事にも悔いは必ず残るようにも思えるが、それが可能な限り少なくなるように心がけながら、二度と生起することのない「一期一会の今ここ」を大切に生きてゆきたいと私自身念じている。

ブーバーの「回心」に関連して、次元は異なるが私自身の「回心」についても記しておきたい。ブーバーの『我と汝』との出会いを通して私は、それまでの根源語＜われ - それ＞的な自己完結的な「モノローグの世界」から次第に根源語＜われ - なんじ＞を語る「ダイアローグの世界」の存在に気づかされ、その世界へと招き入れられてゆくようになる。それは劇的なかたちで短期間のうちに起こったわけではなく、じわじわと時間をかけて起こっていった。振り返ってみるとそれが私自身の「回心」体験であった。ブーバーの『我と汝』という著作が私自身の目を開いたのである。それは私に人間が語る根源語の二重性に応じて世界が二つの姿を取ることを教えてくれた。二つの別個の世界があるわけではない。一つの世界が人の二つの態度（二つの「根源語のいずれかを語る」という行為）に応じて二重の様相をもって私たちの目の前に立ち現れてくるのである。従って、あれかこれかを選ぶのはこの私自身の「根源語を語る」という主体的な態度 / 行為による。もっとも＜われ - なんじ＞の出会いは全人的で専一的な出来事であるために、そこでは自ずから能動と受動とは止揚されて両者の違いはほとんどなくなってゆくとブーバーは言う[16]。

ブーバーの『我と汝』と出会う以前の私は、自己の内にほぼ完全に閉ざされた、自己中心的でモノローグ的、分析的で自己完結的な生、すなわち＜われ - それ＞的な生き方に終始していた。もちろん今でもそのような私が私の内には存在している。それは他者を徹底的に「自己の経験・利用の対象」としてしか見ようとしない「ナポレオン的な生き方」でもある[17]。もちろん、物質それ自体が悪ではないように、＜われ - それ＞の世界自体も悪ではない[18]。それ以前の私は、＜われ - なんじ＞という神の恩寵の中に輝く光に満ちた豊かな生の次元を知らずに、＜われ - それ＞という干からびて暗く貧しく孤立した次元でのみ生きてきたことになる。もちろんそれまでの私にも断片的・刹那的には、芸術や文学や自然との出会いを通して美的な感動体験や宗教的な陶酔・至福体験が与えられた瞬間もあった。それが＜われ - なんじ＞という人格的な出会いの体験であったことを意識するようになるのは、やはりブーバーとの出会いを通してであった。私にとってそれはパウロ同様に「目からウロコ[19]」が落ちるような体験であった。たとえその出会いが時間の経過と共に＜それ＞という過去の記憶の一つになってしま

うとしても、神の恩寵を得ることさえできれば、再びサナギが蝶になってゆく場面[20]に立ち会うことができるということを私は知ったのである。

換言しよう。ブーバーと出会う以前の私は、分厚く固い殻を被って肥大化した「個我」の世界のみに生きていた。デカルト的な「cogito, ergo sum（われ思う、ゆえにわれ在り）」という自己の内に閉ざされた自己完結的な世界、＜われ - それ＞というモノローグの世界においてのみ生きていたことになる。そのような孤立した世界の中にいた私に、ブーバーは、自己の全存在をもって＜なんじよ＞という根源語を他に向かって語りかけてゆくという、限りなく豊かで交響的な次元を示してくれたことになる。そこにおいて私は、相互に応答し合う人格的な深い対話の喜び、恩寵の恵みを知ることになる。＜われ - なんじ＞の出会いとは、実は神の「恩寵」との出会いである。そこにおいては恩寵によって、デカルト的な「cogito, ergo sum」という閉ざされた世界から、「responde, ergo sum（われ応答する、ゆえにわれ在り」という開かれた世界への突破が起こる。それは私にとって「コペルニクス的転換」でもあった。私はそこに＜永遠のなんじ＞からの呼びかけを知ることになる。

もちろん、＜われ - なんじ＞関係も時間の経過によってやがては＜われ - それ＞関係に変化してしまうという「運命の崇高な悲哀[21]」を伴っているにしても、その次元を知らなかった以前の私に戻ることはできないし戻りたいとは思わない。私にとって＜われ - それ＞の世界から＜われ - なんじ＞の世界への転換は、深い喜びを伴うことであった。ブーバーもまた＜われ - なんじ＞という重要なインスピレーションが天から与えられ、『我と汝』を執筆し始めたときには、たとえ非陶酔的であったとしても、私同様の深く静かな恩寵の光と喜びとに満たされていたのではなかったかと推測する。可能な限りこの恩寵の次元、光の次元を人々と分かち合うこと、それがCPEやグリーフケア、スピリチュアルケアに関わる私自身に天から示されたミッションであった。

ブーバーは言う。「世界は人間のとる二つの態度によって二つとなる[22]」。「二つの態度」とは「根源語（Grundwort）＜われ - なんじ＞を語る態度」と「根源語＜われ - それ＞を語る態度」の二つである。繰り返しになるが、「二つの世界」があるわけではない。「一つの世界」が人間の語る根源語の二重性に応じて「二つの姿」をもって立ち現れるのである。また、そこには＜われ＞それ自体というものは存在しない。あるのは二つの根源語＜われ - なんじ＞における＜われ＞か＜われ - それ＞における＜われ＞なのである。根源語は常に「対となった語（Wortpaar[23]）」である。従って、根源語 <Ich-Du> を語る時の <Ich> と根源語 <Ich-Es> を語る時の <Ich> とは異なる。「cogito, ergo sum」を語るときに人はどこまでも根源語＜われ - それ＞における＜われ＞の次元で生きている。しかし「responde, ergo sum」を語るときに人は根源語＜われ - なんじ＞における＜われ＞の次元において世界と向かい合い、両者が交響的に響き合う中を生きているのである。

＜第２章　神の「恩寵」との出会い＞

＜われ - なんじ＞の出会いは人が追い求めることによっては生起しないとブーバーは言う。＜なんじ＞との出会いは人間の意図や計画や努力によって獲得されたりコントロールされたりするものではなく、それらを超えて常に神の「恩寵」として向こう側から人に贈り与えられるものなのである。もちろん、＜われ - なんじ＞の出会いは「根源語＜われ - なんじ＞を語る」という人間の側の実存的な態度 / 姿勢なしに生起するわけではない。しかしそこで主体として働いているのは、どこまでも「神の恩寵」である。「恩寵」は「精神 / 霊 Geist」または「愛」、さらには「言葉」とも呼ぶこともできよう[24]。ブーバーによれば、それらは＜われ＞と＜なんじ＞の「間」に存在している。その意味でブーバーにおいては常に、「神」とその「恩寵」が、そして「精神」と「愛」

と「言葉」というものの存在が＜われ - なんじ＞という出会いの前提になっている[25]。彼は「神」を「けっして＜それ＞になることはない人格的な存在」であり「けっして人の経験・利用の対象になることのない存在」という意味で＜永遠のなんじ＞と呼ぶ。「神」とは、向こう側から私たちに向かって常に＜なんじよ＞と親しく呼びかけてくる、どこまでも人格的な存在なのである[26]。

聖書を読むと常にイニシアティブは神の側にあることが分かる。神がまず呼びかけ、人がそれに応答する。神が最初に語り、人がそれに従うのである。旧約聖書の申命記 6:4 に「שְׁמַע יִשְׂרָאֵל シェマー、イスラエル[27]」という語が記されているように、聖書によれば人は神の呼びかけの声 / 言を正しく聴き取るよう求められている。創世記 1:27 は人が「神のかたち（צֶלֶם ツェレム）」に創造されていると伝えている。その語は「鏡像」とも「影」とも訳される語であるが、私自身はそれを人が神と向かい合って生きるように原初から神との関係の中に創造されているという意味で理解している。人は常に神の前に生きるのである。イエスも荒野でサタンの誘惑を受けたとき次のように語っていた。「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と（マタイ 4:4）。

既に触れたように私自身は、モノローグ的な＜それ＞の世界に生きることで「自己完結的」になるのではなく、宗教的な世界において霊に充たされて「自己陶酔的」になるのでもなく、一期一会の今ここを大切にしながら、非陶酔的で温かく、自他に対して開かれた対話的な態度をもって目の前にいる「一人ひとり」に向かい合ってゆきたいと願っている。実際にそれがどこまでできているかは別として、そのような基本的な構えをもって私は他者と向かい合ってきたように思わされている。ブーバーから学んだ生き方である。

ダイアローグ的であるかモノローグ的であるか、ハムレット的に言うならば「それが問題」なのである。日本ルーテル神学校での CPE クラスにおいても、上智大学のグリーフケア研究所でのグループワークにおいても、私はシンプルなほど一貫してブーバーから示されたこの視座から人や事柄を見てきた。そして常にそのように現実を見ようとしている自分に気づかされた。ロブスターは硬い殻を繰り返し脱皮することを通して成長してゆくが、人も自身の「モノローグ的な殻」を脱皮しなければ霊的 / 精神的 / 言葉的（spiritual）に成長してゆくことはできないのではないか。ロブスターの場合、硬い殻を脱皮できなければそのまま死んでしまうし、脱皮後 24 時間は柔らかい外皮のままであるために外敵に襲われたらひとたまりもない。それほど「脱皮」とは命がけの危険な冒険なのである。しかし脱皮がうまくゆけばロブスターは二回りも三回りも大きくなって成長してゆく。人間の場合もおそらく同様なのであろう。人は皆、目には見えないけれども「硬い殻」をその「こころ」にまとっている。自身を守るためである。特に CPE では内なる「気持ち」や「感情」の動きに焦点を当てながら、各自の生育歴や逐語会話記録について少人数のピアグループで時間をかけて丁寧に検討する[28]。グループワークでは人間関係における各自の「対応の良し悪し」を問題とするのではない。自他の「感情」を意識しつつそこに焦点を当てながら、相手の気持ちを自分がキチンと受け止め、そして相手に自分の気持ちをキチンと伝えることができているかということに焦点が当てられてゆく。そこでは各自の「癖」や「個性」がそのまま出てくるが、それを「良し悪し」や「正誤」で判断することはしない。それはあくまでもその時の自身が持つ「癖」や「個性」でしかない。しかしもし自分の内にある過去の「感情」（特に未解決のままの「感情」）や「癖」や「個性」が、他者の思いや気持ちをありのままで受け止めることの妨げとなっているとすれば、まずそれに気づくことが求められる。

ブーバーは「感情」を人の内側に存在するものとして位置づけているが、そのことについては後述することにしたい。結論を先取りして言えば、私たちの「内なる感情」が「神の恩寵」によって

「祝福され、聖化された感情」に変容してゆくとき、それらは＜われ - なんじ＞の「間」で私たちを深く共鳴させ連帯させてゆく「絆」となりうるのではないかと考えている。前述のようにブーバーは「愛」と「感情」を区別して「愛」を＜われ＞と＜なんじ＞の間にあるものと見ており、私たちは「愛」を空気のように呼吸して生きていると語っているが、私見によれば、「聖化された感情」をも私たちは空気のように他者と共有し、呼吸を合わせながら生きてゆくことができるようになるのである。そのような確かな恩寵の次元が、＜われ - なんじ＞という出会いを通して次第に明らかとなってゆくと私は考えている。

＜第３章　「一人ひとり」を信頼し、どこまでも大切にする生き方＞

私がブーバーから学んだ二つ目のことは、目の前に向かい合う一人ひとりを信頼し、かけがえのない存在として大切にするというあり方である。80 歳の誕生日を前にしてブーバーが謝辞を述べている文章がある。いかにも「対話哲学者」ブーバーらしく、印象に残る挨拶である。彼はこう記す。「老いてくればくるほど、感謝したくなる気持ちが湧いてくるものです。まずは、高き上の方（＜永遠のなんじ＞のこと：大柴註）を見上げて、このいのちというものが、無償で授かった賜物として、これまでになく有り難く受けとめられるようになります。でも、それだけでなく今度は、共に生きてきた人たちに向けて、どうしても繰り返し感謝したくなります。その人が、何か特別なことをしてくれたから、というのではなくて、では、どうして？ 私と出会い、現に出会いつづけてくれたから。しっかりとまなざしを私に向けて、他の人と私を取り違えたりしなかったから。しっかりと耳を傾けて、私が言わねばならなかったことを聴き取ってくれたから。というより、私がまさに、それへ向けて語りかけたあなたの心を、閉ざすことなく開いてくれたから。ここで私が語った全ての人に向けたこの感謝の言葉は、集まった《皆さん》に向けられているのではなく、一人ひとりの各人に向けられています」（下線は大柴[29]）。ブーバーは「今ここ」で向かい合う一人ひとりとの出会いを神の恩寵の中に受け止めて、どこまでも大切にしてゆくのである。私たちも心してその生き方に学びたい。

＜われ - なんじ＞の出会いを人は自分でコントロールすることはできない。すべてを自己の経験・利用の対象である＜それ＞として捉える＜われ - それ＞関係とは異なり、平石善司が指摘しているように、＜われ - なんじ＞関係は常に直接的、全体的、現存的、専一的、相互的という特徴を持つ[30]。一つひとつが「筋書きのないドラマ」として起こる。それを人は自分の都合のよいように操ることはできない。＜われ - なんじ＞の出会いは、先述のように、人の思いを越えたかたちで常に向こう側から神の「恩寵」として与えられる。人間は神の恩寵を自らコントロールすることはできないのである。前述のように、ブーバーは「神」を、常に向こう側からこの私に向かって親しく＜なんじよ＞と呼びかけてくる＜永遠のなんじ＞として捉える。＜永遠のなんじ＞からの呼びかけの声に忠実に応答してゆくことが私たち人間には求められている。しかもその呼びかけの声はどこか遠いところから響いてくるのではない。私たちの眼の前にいる具体的な「一人ひとり」を通して届けられるのである。ブーバーは言う。「個々の＜なんじ＞との出会いの延長線上に、＜永遠のなんじ＞は垣間見える[31]」と。この個々の＜なんじ＞との出会いを＜永遠のなんじ＞を垣間見る「窓」として捉えるブーバーの姿勢は、人が神によって「imago dei（神の似姿 / 鏡像 / ツェレム）」（創世記 1:27）に創造されていると伝える旧約聖書の伝統に連なっている。またそれは、私自身がこれまで牧会や CPE の体験を通して学んできた「出会い」の、また個々人の「いのち」の「かけがえのなさ irreplaceability[32]」にも通じている[33]。

＜第４章　レジリエントなブーバーの思想 ～「神の蝕」と「善悪の諸像」＞

ブーバーはやがて「神の蝕（Eclipse of God）」という概念をその思想の中に導入してゆく[34]。太陽と地球との間に月が重なると「日蝕」が起きるように、神と人間の間にその光を妨げる「何ものか」が介入すると「神の蝕」が起きると彼は考える。たとえ神の光が見えなくなったとしても、それはニーチェが言うように「神は死んだ」わけではないのだ。ただ神からの光が隠されてしまう「神の蝕」が起こっただけなのである。肥大化したモノローグ的な自我が神からの恩寵の光を隠してしまうこともあるであろう。しかしもし私たちがそこで光を妨げているものを取り除くことができるなら、「神の蝕」は終わり、私たちは再度その光を取り戻すことができるようになるのである。そのようにブーバーの思想は困難な中にあっても私たちに希望を指し示してやまない。それは極めてレジリエントな、しぶとくしなやかで現実的な思想であると私は受け止めている。

ブーバーは「人間悪」についても旧約聖書からその探求を深めてゆく。彼は「悪」を徹底的に「混乱の中にある無秩序な混沌状態」と見る[35]。それに対して彼は「善」を「神に向かって正しく方向づけられた状態」と定義する。これは「回心」を現す「שוּב（シューブ）」というヘブライ語が本来「（神に）戻る、立ち返る」という意味を持つことと合致する[36]。ヘブライ語聖書によれば人は神から常に呼びかけられている存在であり、その呼びかけに正しく応答し、神に向かって根源語＜われ - なんじ＞を語りながら生きるように求められている。その＜永遠のなんじ＞からの呼びかけの声に気づくこと自体が「恩寵」なのである。

この理解からブーバーは、悪に陥った人間の救いが可能であるかどうかについて次のように語る。「第一に人間が悪から自分の全存在をかけて転向し、神との義しい関係を確立しようと決意するとき、第二に神がその恩寵をもって人間の決意に答えるとき、そして、神と人間とがふたたび失われた対話を回復するときには、人間はかならず悪から救われる」と[37]。人は神の恩寵によって必ず悪から救われるのである。人間は変わりうる。

このことは野口啓祐との往復書簡にある次のようなブーバーの言葉にも合致する。彼は言う。「この世においてもっとも醜悪なるものも、実は神の恩寵によってまだ聖化されていない状態にあることを示しているにすぎないのです」（野口啓祐訳、『対話の倫理』、創文社、1967、p275。下線は大柴）。この言葉はブーバー自身の、生涯を貫いて大切にしてきた「対話的な生」をよく現している。「＜われ - なんじ＞という根源語を語る」ということは実は、神の恩寵の中に相手の全存在を肯定し、共に神によって祝福され聖別され聖化された状態に移り変わってゆくことであり、それに参与することなのである。「もっとも醜悪なるもの」という言葉には、人間を自己の経験・利用の対象である＜それ＞としてしか捉えなかったナポレオンだけでなく、第二次大戦中に600万人ものユダヤ人の命を奪うホロコーストを引き起こしたヒトラーおよびナチス・ドイツの存在も意識されているであろう[38]。ブーバーに言わせるならば、そのような者も（ある意味では、到底「救いようのないように見える者」も）、神の恩寵によって聖化される可能性が根源的にはあるというのである[39]。これは凄まじい言葉であり宣言ではないか。すべての存在は創造主なる神の前に立たされているのだ。否、すべての存在は神の恩寵の光の中に置かれており、＜永遠のなんじ＞たる神から、＜なんじよ＞と親しく呼びかけられ肯定されていると言うのである。この神からの呼びかけの声に気づき、その声を聴きとり、この呼びかけに私たちも正しく＜われ - なんじ＞という根源語をもって応答すること。それが求められている。そしてブーバーにおいては、＜永遠のなんじ＞に応答することは、個々の＜われ - なんじ＞関係の中で誠実に、人格応答的にダイアローグしてゆくことと一つなのである。具体的に眼の前に

向かい合っている人をどこまでも大切にしてゆくことが求められる[40]。＜われ - なんじ＞の根源語をもって生きるならば、この悲惨に満ちた人間の現実世界も、聖なる神の豊かな恩寵の世界として聖化されるのである。恩寵において人間は必ず変わりうる。

＜第５章　「間」の領域の重要性＞

もう一つブーバーから学んだ大切なことは、＜われとなんじ＞の「間」の領域の大切さである。ブーバーによれば、「愛」も「精神[41]」も、また「ことば」も「知」も、＜われ＞の「中」にあるのではなくて＜われ＞と＜なんじ＞の「間」にある。それは私たちの中を流れる「血液」のようなものではなくて、私たちがその中に生きて呼吸している「空気」のようなものなのである。この「間」の次元に気づくことで、私たちは自己を相対化することができるようになる。たとえば人間関係に何か問題があった場合、その問題が相手の側にあるのか、自分の側にあるのか、自分と相手の「間」にあるのか、三つの可能性が考えられるであろうし、もしかすると問題は複合的にからんでいるのかもしれない。事柄を解決してゆくためにも「間」の領域を常に視野に入れておくことは大切なことであろう。

さらに付け加えるならば、聖俗を分離しないことの大切さ、目の前の現実から逃避しないことの大切さをブーバーは私たちに教えてくれている。ブーバーは一人ひとりの＜われ - なんじ＞の出会いの中に＜永遠のなんじ＞の現存を見ている。彼は言う。「個々の＜われ - なんじ＞の出会いの向こう側には＜永遠のなんじ＞が垣間見える[42]」と。個々の＜われ - なんじ＞は＜永遠のなんじ＞を垣間見る「窓[43]」なのである。今井伸和はそれを「日常の聖化」と呼んだ。そこにはブーバーの「思想的源泉」（平石善司[44]）でもある「ハシディズム[45]」の大きな影響も認められるであろう。「忘我の告白」から「回心」（悔い改め）を経て、ブーバーは神秘主義的で陶酔的で独白的な生き方を断念した。それに代えて、どこまでも具体的で対話的な生を選び取ったのである。

＜第６章　「沈黙」の重要性＞

「沈黙」の重要性についても言及しておきたい。日野原重明は対人援助職での大切な姿勢として「か・え・な・い・心」を挙げている[46]。それは私の理解するところによると、「見立て」「差配」「しつらえること」をしない生き方であり、自分の中にシナリオ（脚本）や計画を持たず、場に対して開かれた「無心」の生き方をすることでもある[47]。このことはグリーフケアやスピリチュアルケアの領域において、「見立て」を重視する医療従事者や臨床心理家などとは決定的に異なる点ではないかと私は考えている。グリーフケアのグループワークにおいてもそのような専門職に就いている受講生は少なくないが、グリーフケアやスピリチュアルケアに関わろうとする人はまず自分が馴染んできた「看護師モード」や「臨床心理士モード」、「宗教者モード」などを脇に置いて、ありのままの自己でいることが求められる。「見立て」や「差配」、「予想」や「シナリオ」等を含め、「道具」も「防衛心」も何も持たずに「素手」で、「無心」になって何も考えず、頭の中の声を沈黙させながら、眼の前にいる人に呼吸を合わせて向かい合う姿勢を学び取らなければならない。そのためにも CPE に関わる人たちは、自分の頭の中で発せられている「ああでもない、こうでもない」という自己の内なる「声」をまず沈黙させなければならない（しかし果たしてそのようなことが現実の私たちに可能なのだろうか）。「言葉」は「声」を通して伝達されてゆく。その意味で「声」とは「言葉」を運ぶ「器（vessel）」であり「車（vehicle）」でもある。しかし、頭の中で自らの多くの「声」が発せられている限り、耳からは他者の「声」も「気持ち」も入ってはこないであろう。「外からの声」を聴き取るためには、まず「内なる声」を沈黙させる必要があるのである。このことは私自身が若い頃にマックス・ピカートの『沈黙の世界』（佐野利勝訳、みすず書

房、1964[48]）から学び取ったことでもあった。

ボンヘッファーの『共に生きる生活』の中の鋭い指摘をも想起する。彼は「沈黙という奉仕」に先立って「言葉を慎むという奉仕」に言及している[49]。そこで彼は「沈黙し、陰口を言わない」という行為の重要性を語るのであるが、私はそこから敷衍して「頭の中の声をも沈黙させること」の重要性に気づかされた[50]。

＜第７章　「愛」と「感情」、そして「聖化された感情」について＞

ブーバーの「愛」と「感情」の理解に対してもここで再度言及しておきたい。ブーバーは「感情」は人の「内」に宿るが、「愛」はそうではなく＜われ - なんじ＞の「間」に生起し、人が「愛」の「内」に宿るのだという。前述のように彼によれば、「感情」は人の「内」を流れる血液のようなものであるが、「愛」は人がそれを呼吸して生きている「空気」のようなものである。しかし果たして本当にそうであろうか？そのような言い方はステレオタイプ的に過ぎるのではないか。私には閉ざされた「感情」ではない、＜われ - なんじ＞の「間」に位置する開かれた「感情」という次元も存在するのではないかと思われる。＜われ - なんじ＞が必ず＜われ - それ＞になってしまうことをブーバーは「高貴な悲しみ」と呼ぶが、それは「聖化された悲しみ」であろう。同様に「悲しみ」以外にも「聖化され聖別された感情（喜怒哀楽）」という次元も存在するのではないか。

セラピストとクライエントの関係についてもブーバーの理解は少しステレオタイプ的すぎるように私には感じられる。1957 年 4 月にミシガン大学でブーバーとロジャーズとの間で交わされた「対話」が録音され出版された時に、ブーバーは 79 歳でロジャーズは 55 歳。それは終始かみ合わない「すれ違い」の「対話」であった。ロジャーズの側には大いに不満が残ったことであろうし、ブーバーにおいても同様であったであろう。その体験を経て、ブーバーは思うところあって、『我と汝』（1923）に「あとがき」を付している（1957 年 10 月エルサレムにて）。実に『我と汝』が出版されて 34 年後のことであり、ブーバーが 80 歳を迎えようとしているタイミングであった。この「対話」においてブーバーは、頑なまでに終始一貫して、セラピストとクライエントの間での「セラピー関係」は全人的な＜われ - なんじ＞関係とは次元が異なると主張している。ブーバーの同意を得たいロジャーズとは全くかみ合わないのである。またブーバーは、ロジャーズの言う人間同士の水平的な関係における「共感 acceptance」よりも、神との垂直的な関係において与えられる「確証 confirmation」という包括的な概念の方がより大切であると主張する。このことに関しては吉田敦彦[51]（1990）や今井伸和[52]（2015）らの先行研究があるが、私自身は今後の課題としたいと考えている。

これまで私自身がブーバーから学んできたことで、CPE の視座から見て大切と思われることを記してきた。最初に触れたように、巨大な象の一部に触れて象の全体像を示すことはおよそ不可能であろうが、ブーバーという「巨人」との出会いは私の人生においては大きなインパクトがあった。この拙論がどこまで客観性・普遍性を持ち、事柄に即したものであるかは読者からのリアクションに待つ他はないと考えている。

後注

1）マルティン・ブーバー、野口啓祐訳、『我と汝』、講談社学術文庫、2021、p23。この言葉は私の中では藤枝中学三年時の担任・赤堀正巳氏（美術担当）が教えてくださった茶の湯の「一期一会」という言葉とも深く響き合っている。「今ここで、自分の眼の前に座している客人との出会いは生涯一度限りのものかもしれない。だから悔いのないように心を込めてもてなせ」という意味であると学んだ。恩師との出会いに感謝したい。「一期一会」を英訳

するなら字義通りには　“One moment, one encounter.”となるであろうが、そこには美しい意訳もある。“Treasure every moment, for it never recurs.”（毎瞬を宝物のように大切にせよ。なぜならそれは二度と生起しないのだから）。有限な存在である私たちの「今ここ」という時空間のかけがえなさ（irreplaceability）を覚えたいものである。

2）ティリッヒは「ベルリン近郊の町で生まれたドイツ人」として一般に知られているが、今回ポーランドを訪問して実は彼がポーランド領内で生まれていたことを知った。

3）「ブーバー　彼の逝去にさいして試みる一つの評価」。武藤一雄・片柳栄一訳、『ティリッヒ著作集第十巻』、白水社、1990、p368-373。

4）「預言者」とは「神からの言葉」を預かってこの世に対して取り次いで語る人のことを指す。イザヤやエレミア、エゼキエルなど旧約の預言者がよく知られている。

5）偶然その頃手にした金子晴勇氏による『対話的思考』（創文社、1976）のあとがき（p234）に、氏も学生時代に「梅ヶ島」でブーバーの『我と汝』を一気に読了したと記されていて（それが「ルーテルキャンプ場」であったとは記されてはいないが）、そのシンクロニシティに驚かされたことを思い起こす。人生における「出会い」とはまことに不思議なもので、言葉を介して時空間を超えるかたちでも与えられてゆくということを強く意識させられたエピソードでもある。私が福山教会にいた頃に、当時岡山大学院生であった教会員に誘われて、金子氏の岡山大学の退官記念の講義に参加させいただいたことをも思い起こす。人生はまことに出会いである。

6）北陸の古都・金沢で学生生活をしていた頃のこと、私は卒業時にブーバーの『我と汝』について小論を書いた。それは「論文」とは呼び得ないほど稚拙なものであって、平石善司の『人と思想シリーズ　ブーバー』（日本基督教団出版局、1966）の単なるブックレポートのようなものでしかなかった。今記している拙論も実存的・個人的な「覚書」であり「報告」でしかなく、果たしてそれを「論文」と呼びうるかどうか私には分からない。

私の金沢大学法文学部哲学科での指導教官は、東洋哲学の助教授でありサンスクリットの大家でもあった鎧淳先生。ある時私は、ブーバーに関連して、鎧先生から東京大学の宗教学の田丸徳善先生をご紹介いただき、赤門前の喫茶店でお話を伺ったことがあった。師の学恩に報いることができないまま今日まで時間が経過してしまったことはまことに慚愧の念に堪えない。その意味でこの覚書は私にとってはアウグスティヌスの『告白録』のようなものであり、これを書くことで一つの節目としたいと考えている。

1999年4月から2016年3月までの17年間、私は日本ルーテル神学校で牧会学の講義を担当した。その中で私は毎年、神学生たちにブーバーの『我と汝』のブックレポートを課題の一つとして課した。牧師という対人援助職に就くに当たり、「モノローグ的な＜われ - それ＞的な生」ではなく、「ダイアローグ的な＜われ - なんじ＞的な生」を知る喜びとその姿勢とを共に分かち合いたかったためでもある。

COVID-19下の2019～2021年に14回に渡り、私は神戸女学院大学の大学院生や上智大学グリーフケア研究所の修了生たちと共に、ブーバーの『我と汝』の読書会を行った。いつか『我と汝』の読書会をしたいと考えていた私にとっては長年の夢がかなったことでもあった。残念なことにパンデミックのために14回で終了してしまったが、厳しい状況下においてブーバーの実存と思想とを分かち合うことができたのは私にとって至福の時でもあった。その主要な参加メンバーであった児島若菜（呼びかけ人）、田中まひる、前田幸美、岩岡由香、大柴金賢珠の各氏に感謝したい。その中で気づかされた重要なポイントの一つがある。岩波文庫版の『我と汝』の表紙には二人の人が向かい合って座っている（＜われ - なんじ＞の）姿が描かれているが、2021年に出版された講談社学術文庫版『我と汝』の表紙には、二人の人が同じ方向を向いて一緒に海に沈もうとする太陽（それは＜永遠のなんじ＞を現しているであろう。もしかしたらそれは日没ではなくて日の出なのかもしれないが）を見ている姿が描かれている。両者が対照的な絵であることにハッとさせられた。そしてそれと同時に、その両者が共に大切であることに読書会のメンバーは気づかされたのであった。前者は個別の相互的な＜われ - なんじ＞関係を表し、後者は＜永遠のなんじ＞との＜われ - なんじ＞関係を表しているであろうが、それらは「今ここ」という現実の中にクロス（交差）している。二人の人間は互いに向かい合うことを通して＜永遠のなんじ＞たる神を共に見上げているのである。

7）日本福音ルーテルむさしの教会（東京都杉並区）。なお、7年に一度研修休暇を取るという「サバティカルリーブ」はJELCにおいては未だ規則化されてはいない。

8）三回とは、①東京の聖路加国際病院での3週間（1985）、②米国フィラデルフィアのJeanes Hospitalでの3ヶ月間（1996）、そして、③米国サ

ンディエゴのVITASでの3ヶ月間（2004）のCPE（Level II）である。

9）彼女との出会いはJELCの先輩牧師である伊藤文雄氏の紹介による。伊藤氏はJELCと米国福音ルーテル教会（ELCA）との「日米協力伝道」の一環としてカリフォルニアに牧師として派遣されていた時にMariaと出会った。彼女の著作には『我と汝』を分かり易く説き明かした『Why We Are in Need of Tales』シリーズ（Kindle版もあり）があり、有り難いことに彼女は最初の二冊を日本にいる私にわざわざ送ってくださった。今回の拙論のためにも、「祈りは時間のうちにはない。時間こそ祈りのうちにある。犠牲は空間のうちにはない。空間こそ犠牲のうちにある」（Kindle版、p16）という難解なブーバーの表現をめぐってMariaとWillyご夫妻からは貴重なアドヴァイスをいただいている。彼女のご伴侶・Rev. Dr. Willy Crespoは聖公会の司祭で、私がサンディエゴでCPEを取った2004年夏にはサンディエゴの拘置所（jail）のチャプレンだった。その拘置所の中で開かれていたお二人の哲学の自由討論クラスに二度ほど参加させていただいたことは私にとって忘れられない体験であった。拘置所内の狭い通路をWillyが前後の扉の鍵の開け閉めを繰り返す中で少しずつ進んでいった時に覚えた不安（私は閉所恐怖症でもある）や、そのクラスで一人の参加者が発した「出会いとは置き換えが効かないもの（irreplaceable）」という発言は今でも私の心に深く刻まれている。

10）サンディエゴ滞在中の三ヶ月、私はご夫妻から二度もご自宅に招かれるという栄誉を得ることになる。ブーバーと直接握手したであろうフリードマン氏の手の確かな温もりを私は生涯忘れないであろう。間接的に私はブーバーと握手したのだと思っている。

11）実は私は厚かましくも、フリードマン氏にお願いしてその書籍を二セットいただいた。ワンセットは当時白血病のため東大病院に入院していた榎津重喜神学生のためだった。マックス・シェーラーの研究者でもあった榎津氏（1954-2005）はブーバーにも造詣が深かった。氏は2002年に長年の牧師となる夢を実現するため日本ルーテル神学校に入学したが、志半ばに病に倒れて天に召されることになる。私の牧会学の講義の中で一度氏にブーバーについての特別講義をしてもらったことを思い起こす。ルーテル神学校有志でまとめられた追悼文集『十字架の言葉は滅びない～榎津重喜神学生遺稿・追悼文集』（2005。私費出版）には、氏の忠実な歩みが刻まれていて心打たれる。

12）ブーバーは1909年に『忘我の告白』という書物を公にしており、その日本語訳も出版されている（田口義弘訳、法政大学出版局、1994）。ブーバーの著作が現在においても継続的に日本語でも出版されていて、また論文が執筆され続けられている事実からも、ブーバーの思想がいかに現代社会において重要なものであり続けているかが分かる。

13）「回心」は旧約聖書のヘブライ語では「シューブשׁוּב」という語で、「神に立ち帰ること」を意味する。旧約聖書のギリシャ語訳（「70人訳聖書LXX」と呼ばれる）や新約聖書のギリシャ語でそれは「メタノイア」で、通常は「悔い改め」と訳されるが「懺悔」と呼ばれることもある。

14）『対話的原理II』、みすず書房、ブーバー著作集2, p189。この発言の背後には、幼い頃からブーバーに深い影響を与え続けたハシディズム（18世紀にポーランド南部に起こったユダヤ教内部の敬虔主義運動）があることは明らかであろう。ブーバーは3歳の頃に両親の離婚を通してポーランドのガリツィア地方に住む祖父母のもとに預けられることになる。祖父のソロモン・ブーバー（1827-1906）はユダヤ教の研究者としてもよく知られていた。ブーバーは幼い頃から、特に祖母から受けた大きな影響もあって、様々な言語に習熟する機会を得て語学力に長けていた。彼はドイツ語、ヘブライ語、イディッシュ語（東欧のヘブライ語方言）、ポーランド語、英語、フランス語、イタリア語を自由に使いこなし、スペイン語、ラテン語、ギリシャ語、オランダ語を読解することができるほどの高い語学力を身につけていた。

15）今井伸和はこのことを「日常の聖化」という表現で捉えていて印象に残る（「ブーバーにおける『神との関係』と『日常の聖化』との関連」、大阪公立大学リポジトリ、2010）。

16）ブーバー、『我と汝』、Kindle版、p109-110。「だから『まじわり』とは『選ばれること』と同時に『選ぶこと』を意味するのである。それはちょうど、全身全霊を傾けての積極的な『動』の行為が、あらゆる部分的な行為を停止し、したがって、個々に限定された行為についてのあらゆる感覚を麻痺させるため、かえってまったく受動的な『静』に感じられるのと同じである。このように、完全な『動』が完全な『静』に転じるのは、人間が全身全霊を傾けて行為するために生じるのであって、それは一名『無為』とも呼ばれる」。ブーバーはここで「動」と「静」が全身全霊の中で重なり合うことを「無為」と呼んでいる。私にとってそれはとても興味深い概念でもある。それを「無心」とも言えるのではないか。この「無為」「無心」についての探求は私の今後の課題としたい。

17）ブーバーは根源語＜われ - なんじ＞を語る人物として、ソクラテス、ブッダ、イエス、ゲーテの四人を挙げ、根源語＜われ - それ＞を語る人物としてナポレオンを挙げている。ナポレオンに関しては『我と汝』Kindle 版の p98-100 を参照のこと。私見であるが、ブーバーは後には心の中でナポレオンに加えてヒトラーの名をもそこに加えていたのではないか。もっとも『我と汝』の出版は 1923 年であり、ヒトラーの出現（1933 年）には 10 年ほど先立っていたのではあるが。

18）ブーバー『我と汝』kindle 版、p69。「＜われ＞-＜それ＞という根源語そのものは決して悪ではない。ちょうど物質それ自身が悪ではないのとおなじである。だが、もしもこの根源語が、いかにも現存的特質を有するがごとく見せかけるならば、物質の場合と同様悪となる。」

19）使徒言行録 9:18。

20）ブーバー、『我と汝』、Kindle 版、p29 と p168。

21）ブーバー、『我と汝』、Kindle 版、p141。

22）ブーバー、『我と汝』。植田重雄訳、岩波文庫、p7。

23）その語を講談社学術文庫版で野口は「複合的な語」、岩波文庫版で植田は「対応語」、みすず書房版で田口は「対偶語」と訳している。

24）それらは人間の内に宿る「感情」とは異なり、「空気」のように＜われ - なんじ＞の「間」に存在し、人間がそれらの内に住むのである（Kindle 版の p25、p59、p60、等々）。

25）ブーバーは言う。「〈なんじ〉と〈われ〉とが出会うのは、ひとえに恩寵のたまものである。われわれは、ただ探し求めるだけでは、〈なんじ〉と相会うことができない。しかし、わたしが根源語を語るのは、わたしの全存在をかけた行為――わたしの真に本質的な行為――なのである。〈なんじ〉は〈われ〉と出会う。それは事実だがしかし、〈なんじ〉と直接に出会うのは〈われ〉だから、『出会う』ということは結局、『えらぶ』こととなり同時に『えらばれる』こととともなる。また、『する』ことは同時に『される』こととともなる。それは、ちょうど、自分が全身全霊をこめてなにかをする場合と似ている。このような場合にも、あらゆる部分的行為は止み、またその特殊な限界から生じる感覚も消えてしまう。その結果、『すること』はかえって『されること』に感じられるようになるのである。〈われ〉-〈なんじ〉の根源語は、自分の全身全霊を傾けて語るよりほか方法がない。わたしが精神を集中して全体的存在にとけこんでゆくのは、自分の力によるのではない。しかし、そうかといって、自分なしでできることでもない。まことに、〈われ〉は、〈なんじ〉と出会うことによってはじめて、真の〈われ〉になるのである。わたしが〈われ〉となるにしたがって、わたしは相手を〈なんじ〉と呼びかけることができるようになるのである」(Kindle 版、p20-21)。

ブーバーがカール・ロジャースと行った対談（1957）もまた結果としてこのことをよく示している。二人の対話はまったく「すれ違い」に終わる。ロジャーズも若い頃に神学校で学んだことがあるのであるが、彼は不思議なほど神や信仰について（直接的には）語らない。それに対してユダヤ人であるブーバーは、たとえ信仰や神について直接語ってはいなくても、常に神を意識し、神の前に立ち続けている。この対談においてブーバーは＜永遠のなんじ＞と人の「間」の垂直次元における「確証 confirmation」という概念を繰り返し強調するのに対して、ロジャーズは人と人との「間」の水平次元における「受容 acceptance」について語り続けている。その対談には二人のまったく次元の違う立場が鮮やかに浮かび上がってきていて、クロスすることがない。私には両者が両方とも同時に必要であり、大切であると思えるのではあるが。

26）「学問」というものは時空間や言葉を超えた「真理」を言葉によって＜それ＞化し、その対象とする。その意味で「神学すること」も神を＜それ＞化する作業を内に含んでいる。日本ルーテル神学校で私は恩師の石居正己教授から「神学」とは「神を対象とする学問ではない」と学んだ。人は太陽を直接目で見ることができないように、神を直視することはできない。そうではなくて、「神学」とは人がどのように神を信じているかという「信仰の内省の学」なのである。しかし「内省の学」としての「神学」も、学問的な方法論を用いるためには対象を言語化し、「＜それ＞化」しなければならないことになる。ブーバーは親しく私に向かって＜なんじよ＞と「呼びかけてくる神」を対象とする（＜それ＞化する）ことはできないと考えている。その意味でも神は、永遠に＜永遠のなんじ＞であり、＜われ－それ＞にはなりえないのである。＜われ－なんじ＞の出会い・現存体験は人間がそれを対象にした途端に、過去の＜われ－それ＞という経験へと変化してしまわざるを得ない。ブーバーはこれを「運命的な高貴な悲哀」と呼んでいる。

27）イザヤ書は「シェマー、イスラエル」という神の呼びかけの言葉を何度も繰り返している（5:1、6:4、9:1、20:3）。ここでの「イスラエル」を私は広い意味で「神の民」として受け止めている。また、新共同訳聖書などでは「聞け」と訳されているが、私は「聴け」という字をそこに当てたい。さらに

可能であればそこに「聽け」という旧字体を当てたいと考える。そこには「耳と目と心を一つにしてそれらを十全に用いて、王なる者（神）の声を聽け」という深い意味があるからである。キリストを信じる者にとって「王」は、「十字架」という玉座に着かれた王であり「茨の冠」をかぶられた王である。「聴」という字にも「聽」という字にも「十」という字が含まれていることに深い意味を感じるのはけっして私だけではあるまい。キリスト者が信じているのは「十字架の王」だからである。

28）「ピア Peer」とは「仲間 / 同僚」を意味する。CPE（臨床牧会教育）のグループワークは通常スーパーヴァイザー（SV）を含めて 6 ～ 7 人で行われることが多い。

29）吉田敦彦、『ブーバー対話論とホリスティック教育：他者・呼びかけ・応答』、勁草書房、2007、p269-70）。

30）平石善司、『マルチン・ブーバー　人と思想』、創文社、1991。

31）野口啓祐、『我と汝』、Kindle 版、p107 と p126。

32）「かけがえのなさ」とは英語で「irreplaceability」となる。日本語にすれば「置き換えができない」ということになろう。私たち一人ひとりの存在は、部品を交換するようには交換できないのだ。これは 2004 年に私自身が、サンディエゴ拘置所で Dr. Maria Davenza Tillman による哲学ゼミに参加した際に参加者の一人から教えられた重要な概念である。「拘置所」は「刑務所」とは異なり、有罪が確定していない人たちを収監している施設である。Maria のパートナーの Rev. Dr. Willy Crespo は聖公会の司祭であったが、そこでチャプレンとして長く働いていた。

33）このことは、マタイ 25 章に記されている次のイエスの言葉とも重なる：「はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」（25:40）。また、私の恩師である小川修氏（1940-2011）が、50 年にわたるパウロ書簡の研究から「Jesus Christ とは Jesus in Christ のことであり、同時に Christ in Jesus のことである」とし、「人とキリストは一体である」という意味でそれを「人基一体（にんきいったい）」と洞察したことにもつながる（『小川修パウロ書簡講義録』全 10 巻、リトン，　2011-2022）。また、小川氏の恩師であった滝澤克己氏（1909-1984。なお、滝澤は西田幾多郎とカール・バルトに弟子入りしている）はそれを「インマヌエルの原事実」と呼んだ。

34）アメリカの諸大学で講演した『神の蝕 Eclipse of God』（1953）が日本語にも訳されてみすず書房のブーバー全集の第巻に収められている。

35）ブーバー、『人間悪について』、野口啓祐訳、南総社、1968。

36）これは「悔い改め」を意味する「メタノイア」というギリシャ語が「思惟を超える」という語義を持つことと対照的である。ギリシャ語はヘブライ語よりより理念的かつ抽象的であり、ヘブライ語はギリシャ語より常により具体的かつ現実的な印象がある。たとえば、ヨハネ福音書の 1:1 で「初めに言があった」の「言」という語は、ギリシア語では「ホ・ロゴス ὁ λόγος」という（定冠詞つきの）語であるが、現代ヘブル語訳聖書では（定冠詞つきで）「ハー・ダバール הַדָּבָר」となっている（Modern Hebrew New Testament, The Bible Society in Israel, 1976, 1991）。ギリシア語の「ロゴス」には「言葉」以外にも「法」とか「法則」という抽象的な意味があるが、「ダバール」には「言葉」「事柄」という具体的で現実的な意味が込められている。

37）ブーバー、『人間悪について』、p162。

38）2023 年 9 月 13 日（水）～ 19 日（火）と筆者は、ポーランドの古都クラクフで開かれた「世界ルーテル連盟（Lutheran World Federation）第 13 回総会」に日本福音ルーテル教会（JELC）の代表として出席した。15 日（金）には 650 名の総会参加者たちと共にアウシュビッツ・ビルケナウにあるユダヤ人絶滅収容所に足を運ぶことになり、そこで言葉を失うことになる。筆者はこれまでヴィクトール・フランクルやエリー・ヴィーゼル、ポーランド人であったマキシミリアノ・コルベ神父のことは書物を通して知っていた。しかしやはり百聞は一見に如かず、である。

　遠藤周作が『女の一生　第二部・サチ子の場合』でコルベ神父に語らせた言葉を想起する。「神父さん、俺は天国は信じんが、地獄の方は信じるぜ。この収容所が地獄だ。」「まだここは地獄じゃない。地獄とは・・・ヘンリック、「愛」がまったくなくなってしまった場所だよ。しかしここには「愛」はまだなくなっていない。」そう言ってコルベ神父は、自分のパンを隣人に与えていった一人の囚人の姿に言及してゆくのである（新潮文庫、1982、p162）。そしてコルベ神父自身身代わりとなって自分の命を差し出していったのであった。

39）ブーバーは教育ということに関して『我と汝』の「あとがき」（それは 1957 年に追加されている）でこう語る。これはカール・ロジャーズとの対談が行われた同じ年の言葉でもある。「教え子の存在の中にある最善の可能性が実現されることを助けるには、教師は教え子を潜在性と現実性をうちにもった明確な人格だと思い考えなければならない。よ

り正確に言えば、教師は教え子を諸々の性質、欲求、ためらいの単なる総体として知るのであってはいけない。彼は教え子を一つの全体として知覚し、その全体のなかで教え子を肯定しなければいけない」(p186)。これがロジャーズの「受容 Acceptance」に対してブーバーが「確証 Confirmation」と言った事柄の内容である。

40）上智大学グリーフケア研究所で私の同僚の一人であった伊藤高章氏は、それを「患者さんに弟子入りする」と表現していて印象に残る。言い得て妙である。

41）ここで「精神」と訳されている語はドイツ語で Geist。これは「霊」とも「心」とも「魂」とも訳される語であり、聖書では通常「霊」と訳されている。

42）ブーバー、『我と汝』、Kindle 版、p126。

43）同上、p107。

44）平石善司、『マルチン・ブーバー』、創文社、1991、p43。

45）ハシディズムとは、有徳で思いやりのある行動を意味するヘブライ語の「ヘセド（愛）」に起源を持つ「敬虔な者 pious」に由来するユダヤ教内部の信仰覚醒運動であり「敬虔主義運動」のこと。18 世紀にバアル・シェム・トーヴがポーランドにおいて始めたとされる。詳細は平石善司『マルチン・ブーバー』p42-68 を参照のこと。

46）拙論「キリスト教人間学 – 牧会学と臨床牧会教育（CPE）の視座から見えてくるもの」『上智大学グリーフケア研究所　紀要　グリーフケア第 8 号』、2019、p79-80。また、拙著『聽　議長室から』（リトン、2023、p12-13）をも参照のこと。

47）「無心」については西平直氏が『無心のダイナミズム – 「しなやかさ」の系譜』（岩波書店、2014）や『無心の対話―精神分析フィロソフィア』（松木邦裕との共著、創元社、2017）などで探求していて興味深い。

48）ピカートは言う。「沈黙は言葉の背景を持たずに存在しうるが、言葉は沈黙の背景を持たずには存在できない」（『沈黙の世界』p23）。たとえば最近では、沈黙に言及した崎川修氏の『他者と沈黙―ウィットゲンシュタインからケアの哲学へ』（晃洋書房、2020）等の著作もある。

49）ディートリッヒ・ボンヘッファー、森野善右衛門訳、『共に生きる生活』、新教出版社、2014、p134-138。

50）ブーバーの『我と汝』の中でも「語る / 言う」という語に比して「聞く / 聴く」という語が大変に少ないことに気づかされる。Kindle 版の『我と汝』において検索すると「語る」は 59 回で「言う」が 13 回に対して「聞く」は 7 回で「聴く」は 1 回しかない。欧米は「（言葉を）語る」ことが主体の文化であるのに対して日本は「（言葉を）きく」ことが主体の文化なのではないか。インターネットの展開によって現代社会においてはそれはずいぶんと変わってきてはいるであろうが。

51）吉田敦彦、「ロジャーズに対するブーバーの異議―援助的関係における『対等性』と『受容』の問題をめぐってー」、教育哲学研究 62 号、1990。

52）今井伸和、「ブーバーとロジャーズの対話に関する一考察―セラピストとクライエントの対等性の問題―」、三重短期大学生活科学研究会紀要 54 号、2006。

＜ブーバー覚書　参考文献表＞

マルティン・ブーバー

01）Martin Buber, “Das dialogische Prinzip,” Verlag Lambert Schneider, Heidelberg 1973

02）Martin Buber, “Ich und Du,”（German Edition）Kindle 版、Gütersloher Verlagshaus, 2023

03）“I and Thou”, trans. Smith（English Edition）Kindle 版、2011
（なお、もう一つの Kaufmann 訳の Kindle 英訳版、2021 も必要に応じて参照した。便利な時代になったものである）

04）マルティン・ブーバー、植田重雄訳、『我と汝・対話』、岩波文庫、1979

05）同、田口義弘訳、「我と汝・対話」『ブーバー著作集 1 対話的原理 I』、みすず書房、1967

06）同、野口啓祐訳、『われとなんじ』、講談社学術文庫、2021（なお、講談社の Kindle 版も参照した）
（旧版：『孤独と愛―我と汝の問題』創文社、1958）

07）同、佐藤吉昭・佐藤令子訳、「自叙伝的断片」『ブーバー著作集 2 対話的原理 II』、みすず書房、1968

08）同、田口義弘訳、『忘我の告白』、法政大学出版会、1994（原著 1909）

09）同、稲村秀一訳、『義を求める祈りー正と悪をめぐる詩編黙想』、ヨベル、2023

10）同、野口啓祐訳、『人間悪について』、南総社、1968

11）モーリス・フリードマン、黒沼凱夫・川合一充訳、『評伝マルティン・ブーバー　―狭い尾根での出会い』（上下巻）、ミルトス、2000

12）平石善司、『マルチン・ブーバー　―人と思想』、創文社、1991（旧版は日本基督教団出版局より出版。1966）

13）山本誠作、『マルティン・ブーバーの研究』、理想社、1969

14）金子晴勇、『対話的思考』、創文社、1976
15）斉藤啓一、『ブーバーに学ぶ―「他者」と本当にわかり合うための30章』、日本教文社、2003
16）吉田敦彦、『ブーバー対話論とホリスティック教育―他者・呼びかけ・応答』、勁草書房、2007
17）吉田敦彦、「ロジャーズに対するブーバーの異議―援助的関係における『対等性』と『受容』の問題をめぐって」、教育哲学研究62号、1990
18）今井伸和、「ブーバーとロジャーズの対話に関する一考察―セラピストとクライエントの対等性の問題」、三重短期大学生活科学研究会　紀要第54号、2006。
19）今井伸和、「ブーバーにおける『神との関係』と『日常の聖化』との関連」、大阪公立大学リポジトリ、2010
19）大柴譲治、「キリスト教人間学」『グリーフケア研究』、上智大学グリーフケア研究所紀要第9号、2019
20）大柴譲治、『聴 議長室から』、リトン、2023
21）小川修、『小川修パウロ書簡講義録』全10巻、リトン、2011-2022
22）西平直、『無心のダイナミズム―「しなやかさ」の系譜』、岩波書店、2014
23）西平直・松木邦浩、『無心の対話―精神分析フィロソフィア』、創元社、2017
24）マックス・ピカート、佐野利勝訳、『沈黙の世界』、みすず書房、1964
25）崎川修、『他者と沈黙』、晃洋書房、2020
26）ディートリッヒ・ボンヘッファー、森野善右衛門訳、『共に生きる生活』、新教出版社、2014

Pastoral Reflections on Martin Buber's "I and Thou"(1923): From the Point of View of the Supervisory Perspective Within Clinical Pastoral Education.

George J. Oshiba

I have learned a lot of important ideas from Buber's "I and Thou," especially as a supervisor in Clinical Pastoral Education. Buber sees Love, Word, Spirit as concepts between I and Thou, but human emotions as just dwelling inside of the person. Is it so? I can also see the emotions not only inside of the person, but also between I and Thou, consecrated by God's Grace.

Keywords: Martin Buber, here and now, compassion, grace, consecrated emotions